第3回日本宗教研究・南山セミナー

横井桃子
Yokoi Momoko

2018年1月7日・8日、南山宗教文化研究所にて「第3回日本宗教研究・南山セミナー」が開催された。2013年6月の第1回、2015年の第2回に続くものであり、今回も海外の大学院で日本宗教を研究する、日本語を母語としない若手研究者が日本語で研究発表をおこなった。また今回は、名古屋大学・人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）と共催でおこなわれ、発表者6名とコメンテーター7名のほか、研究所内外からの参加者を含む計36名が参加した。筆者は2日目午前中の司会として携わったが、どの発表もレベルが高く、興味深い内容であった。

今回選ばれた6名の研究者と発表タイトルは下記の通りであった。

Hannah Gould (University of Melbourne)
「捨てられるモノにみる宗教の物質性―現代日本における仏壇の事例研究」

Rebecca Mendelson (Duke University／駒澤大学)
「国家のための内観―勝峰大徹とその在家禅」

Dana Mirsalis (Harvard University／國學院大学)
「女子神職は本当に普通の女性として生きられるのか―ジェンダー、関係性と女子神職―」

Lindsey E. DeWitt (九州大学)
「大峰山と沖ノ島での世界遺産と女人禁制について」

Julia Cross (Harvard University／名古屋大学)
「12世紀から14世紀における舎利信仰の共同体」

Esben Peterson (Goethe University, Frankfurt am Main／南山大学)
「ドイツ語雑誌における日本の宗教の位置」

発表タイトルを見て分かる通り、多様な視点からのオリジナリティ溢れる研究発表がなされた。上記の発表に対して、コメンテーターである阿部泰郎氏（名古屋大学）、岩田文昭氏（大阪教育大学）、栗田英彦氏（南山宗教文化研究所）、小林奈央子氏（愛知学院大学）、近本謙介氏（名古屋大学）、ユリア・ブレニナ氏（同朋大学）、吉田一彦氏（名古屋市立大学）の7名がコメントをおこなった。

初日はグールド氏の、「仏壇」をとりあげ、その廃棄というプロセスを観察することを通して、人々が宗教用具に見出す神聖性の境界を論じた発表から始まった。氏は、人口移動に伴う都市化や世俗化などの近代化現象によって、現代の仏壇の置き場の問題や仏教的習慣の喪失および仏壇消費の減少が起こってきたことを踏まえ、フィールドワークによって「仏壇の処分」にかかわる

消費者や僧侶や販売員の姿勢を描き出した。この発表に対し、仏壇の庶民への普及は江戸時代中期頃までに起こったもので比較的新しいつくられた伝統であるとされ、さらにその役割が変容していることから仏壇の伝統の再編成の時期が到来しつつあるのではないかという指摘がなされた。

次のメンデルソン氏は、近代日本における「修養ブーム」と国家主義の関連をとらえる中で、臨済宗僧侶・勝峰が設立した興禅護国会の教えや修行とその国家的位置づけへの模索を論じた。勝峰の残した著作や興禅護国会の資料から彼の教えをつぶさに分析し、政治的観点や在家禅団体のネットワークによる普及という観点から検討した氏は、今後、定量的分析やジェンダー論を援用した幅広い研究を目指していることを述べていた。この発表に対し、興禅護国会の変容とナショナリズムとの関連を整理する必要性があるとのアドヴァイスがなされた。

2日目はデウィット氏の発表から始まった。氏は、奈良県の大峰山、および九州北部の沖ノ島と関連遺産群が世界遺産に登録される際のユネスコへのプレゼンテーションにおいて、これらの聖地に女人禁制が伝統的に施されていることの言及を意図的に避けていたことを指摘し、一方で、現地で女人禁制への反対運動が起こったことや現地の人々の女人禁制に対する意識などをとりあげ、政治的に語られた文化遺産と宗教的歴史的現実とのギャップを記述した。この発表に対し、宗教的遺産・建築物等が観光資源として扱われる一方で、そうした宗教施設の観光社会学的研究あるいは観光資源の宗教社会学的研究があまり蓄積されてこなかった現状の指摘がなされた。

続くマサリス氏の発表では、女子神職というジェンダー役割と深くかかわる個人のアイデンティティと、それに影響をおよぼす家族という社会環境・関係性の観点から、女子神職の役割と現状の検討がなされた。母娘ともに宮司である女性や、結婚後に宮司になった女性など、様々な属性・家族関

係をもつ女子神職らに対するインタビュー調査から、女性であることが神職の価値を高めている一方で、母親・女性の理想的な姿が遂行できていない現状への葛藤があることが示された。この発表に対し、日本の社会構造の影響を考慮する必要性があるのではないかというアドヴァイスがなされ、また数少ない女子神職の研究の発展への期待が述べられた。

昼食をはさみ午後からは、クロス氏の発表で始まった。氏は鎌倉時代から室町時代初期の舎利信仰、とくに「身体の舎利」への信仰がどのような機能を果たしたのかに着目し、法華寺の尼僧と叡尊の関係を事例に、中世ヨーロッパの Futra sacra を比較対象にあげながら、僧侶の間で舎利の移動や配布がおこなわれるなかで、舎利がそれを管理する者の宗教的権威を保つために利用されていたこと明らかにした。この発表に対し、叡尊研究を舎利の観点からおこなうことのオリジナリティや、また「ネットワーク」あるいは「関係」という視座からの研究をおこなう意義を評価しながら、時系列の整理が必要であるというアドヴァイスがなされた。

最後の発表者となったピーターセン氏は、ドイツの宣教師雑誌 ZMR の著者らが日本の宗教について述べた内容を分析し、彼らの当時の日本宗教についての理解がどのようなものであったかを検討している。神学者でもある著者らは、キリスト教神学の教義や思想を基軸として、日本で主流であった仏教をキリスト教と比較し共通点を見出すことで、仏教を普遍的宗教であると結論付けている。さらに氏は、日本の宗教学者はこうした宣教師たちの宗教理解に影響を受けていることも指摘した。この発表に対し、19 世紀末頃の宣教師らが宗教思想の比較を通して日本を理解していた点を評価したうえで、しかし「日本の仏教」を彼らが真に理解していたかという疑問が残るというコメントがなされた。

以上にみてきたように、6 名の発表はそれぞれが独自性に富んだテーマを持ち、またそのアプローチの方法も多岐にわたることがお分かりいただけるであろう。フィールドワークやインタビュー調査といった社会科学的手法を用いた実証的なアプローチを採用する研究が今回多くみられたことも、筆者にとっては驚きであった。筆者も海外フィールドワークの経験があるが、現地の公用語を母語としない者が現地の公用語を使ってインタビューをおこなうということは、インタビュアーの言語レベルにもよるが、インタビュイーの話す内容に臨機応変な返答をおこなうことが難しかったり、細かいニュアンスを伝えきれなかったりするという問題を常に抱えることになる。こうした問題を乗り越えながら、自身のもつ問いを探求しようとする発表者の姿勢には感服するばかりであった。こうした経験にもとづく日本宗教のリアリティを、海外の日本宗教研究者が日本語でも外国語でも発信していくことによって、日本宗教研究の国際的かつ多角的な発展に寄与していることはすでにご承知の通りであるだろう。

さらに驚いたのが、コメンテーターである小林氏も言及されたが、今回の 6 名の発表者のうち 5 名が女性研究者であることであった。日本の大学で宗教関係科目を担当する教員の女性比率はいまだ低いと言わざるを得ない状況にあるなかで、積極的に日本宗教を学び追究していく女性外国人研究者の存在は、学界に大きな刺激をもたらすだろう。トランスナショナルな日本宗教研究が、日本のアカデミズムのしがらみを超

えジェンダー平等な社会でおこなわれていることに深い喜びをおぼえると同時に、国内外の日本宗教研究者の互恵的な協働による発展的な研究体制が整うことを願ってやまない。

おそらくそうした学際的・国際的な日本宗教研究への取り組みは、今回共催となった名古屋大学・人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）を中心として今後積極的に行われていくことになるだろう。現代日本社会に巻き起こっている“文系不要論”に対して、宗教研究界全体がどのようにその価値を提示していけるのかという社会的要請に応えることも喫緊の課題となっている。今回のセミナーは、日本国内外の研究者が集まり議論を交わすことによって、「宗教研究をおこなう意義」といったものまでをも射程に入れたものであったと思う。今後もこうしたセミナーを定期的に開催することで、日本宗教研究の深化と発展に寄与できるものと考える。今回の6名の発表者の健闘をたたえ、また今後の研究の発展を祈りたい。

よこい・ももこ
南山宗教文化研究所研究員